

そろそろ災害情報学の体系化を



学会誌編集委員長・群馬大学大学院教授
片田敏孝

災害情報学とは如何なる学問なのか。本学会の他にも防災関連の学会は沢山あるが、災害情報学を含めて、防災関連分野の学術大系が未だに定まらない。大学における防災の講義もその内容は担当者により様々であり、自戒を込めて言うなら、各地の事例に私的見解を加えて講述する範囲にとどまることが多い。数多く出版されている教科書を見ても、共通して記述される内容は少なく、事例の列挙とアドホックな問題点の指摘が記述されるにとどまる。

もとより災害情報学の目的は、災害情報によって災害時の被害軽減を達成することにある。災害時の被害軽減は、災害情報の内容、伝達がいかにあろうとも、最終的には住民の対応によってもたらされる。その意味において、災害情報学の大系化は、災害に対する人の行動科学が基礎となり、行動変容要因として災害情報を捉えることによって図られるように思う。

災害情報学会も設立から10年の歴史を刻んだ。そろそろ学術分野としての体系化を図る時期が来ているように思う。

大きな財産としてのこの10年



広報委員長・大妻女子大学教授
千川剛史

私が、本学会へ初めて参加したのは、1999年10月に東北大学で開催された第1回研究発表大会だった。

初代会長のご廣井脩先生からは、私の阪神・淡路大震災以来の災害での情報通信技術を活用した被災者や支援者への情報支援活動の経験に目をかけていただき、2001年に学会ホームページ小委員会委員長兼広報委員会副委員長として指名していただいた。そして、2003年より広報委員長を務めることとなった。

年4回発行する学会ニューズレターの編集企画会議では、毎回、各分野の専門家である広報委員のみならずから専門的な話題や情報の提供をいただき、災害分野の新参者である私にとっては、門前の小僧のように、災害に関する各種の専門知識をたくさん吸収することができた。また、学会大会や研究会、シンポジウム等を通じてお会いすることができた多様な分野の方々には、災害時の支援活動や研究活動でいろいろな形でお助けいただいている。

こうしたことが、私の大きな財産となっており、本学会で活動させていただいたことに、深く感謝いたします。

日本災害情報学会の10年に想う

災害情報学会への期待



理事・河川情報センター研究顧問
布村明彦

日本災害情報学会は、災害情報が災害対応システムの一環としての機能を確立していくことを目標に掲げ設立された。10年経ってどれだけ達成されてきたか見つめてみたくなる。

近年、個々の災害時の情報が、住民や防災機関が判断・行動するのに適切なものであったか吟味されるのが、普通になってはきている。かつては、情報発信者は伝えることまでが役目であったが、その後、相手に伝わるのが役目として求められ、さらに受け手の判断・行動に繋がる真の情報として機能していたかが検証されるようになってきた。当学会でのテーマもこうした観点のものになってきている。要は「できてなんぼ」である。目の前の苦しんでいる人を何とかしようという「廣井流」である。中央防災会議が近年目指してきた「形式的防災対応から実践的防災対応へ」の流れでもある。

まだまだ、機能の確立とまではいっていない。そろそろ、体系的整理がなされていい時期ではないかと思うし、戦略を持って解決していくべき時期ではないかと思う。

「廣井先生、もういいですか。」



事務局・元ニッポン放送
中村信郎

「信ちゃん、次期長官の山本さんが有珠の現地に入る。一緒に行かない」。やっと会社から解放され、少年野球を撮っていたら、廣井先生から電話が入った。

翌日、ホテルから伊達市の対策本部に向かうタクシーの中で、廣井先生と事務局長の川端さんがユーエスピーはいいとか何とか、話している。私は卒業する前から、時代はワープロからPCになるだろうとワードを使っていたが、USBのことまで分からなかった。私は現場に着くまでの30分間、全くふたりの会話に入れなかった。

「おーい、一人」と息子と呼ぶと、女房がオロオロする。PCで同じことを3回聞くと息子は怒り出す。私は「会社じゃ同じこと100回聞いても誰も文句は言わない」と怒鳴る。だが今では学会のホームページの更新までできるようになった。息子たちから「パパの歳にしては凄いいよ」と「尊敬」されている。

あの運命の日から10年。廣井先生が病気になってから、学会の事務的なことで負担をかけてはいけないと、それなりに頑張った。だが先生が亡くなってから3年半。もうそろそろ女房孝行をしようと思っている。